

**インタビュー・データについて地域住民と話し合うプロジェクト活動  
—日本語中級授業での実践をふりかえり、その問題点と改善策を検討する—  
A Project Work to Discuss about Interview Data with People in the Community:  
A Practice in an Intermediate Japanese Language Class**

**瀬尾 匡輝・八若 寿美子  
茨城大学**

**要旨**

本稿では、茨城大学で 2018 年度前学期に行ったプロジェクト活動をふりかえる。活動では、受講生達が日本で生活して関心を持ったテーマについてインタビューをし、そのインタビュー・データを一つの映像作品にして、それを地域住民と視聴し、そのテーマについてみんなで議論した。本実践では、世代差を超えたやりとりを促すことで、受講生の日本人や日本文化の多様性や流動性に対する理解を深めることを目指した。しかしながら、受講生は文化の多様性や流動性に対する理解を十分に深めることができなかつたように感じられた。そこで、本稿では、筆者らのプロジェクト活動をふりかえり、なぜ本活動において受講生が文化の多様性や流動性に対する理解を十分に深めることができなかつたかを考察し、その改善策を検討する。

**キーワード：**

インタビュー・プロジェクト、ビジターセッション、文化の多様性・流動性

# インタビュー・データについて地域住民と話し合うプロジェクト活動 —日本語中級授業での実践をふりかえり、その問題点と改善策を検討する—

瀬尾 匡輝・八若 寿美子  
茨城大学

## 1. はじめに

「教師以外の日本語母語話者や準母語話者が『ビジター』として、学習活動の一環として日本語のクラスに参加し、学習者とインターアクションを持つ」（中井 2003: p.81）ビジターセッションが、世界中の日本語教育の現場で行われている。これまでの実践からは、ビジターセッションを通して学習者が日本語運用能力や社会能力を向上させたり、学習動機を高めたり（赤木 2013; 中井 2003; 横須賀 2003）することが報告されている。だが、このような実践では、母語話者である日本人が常に優位な立場となり、いわゆるネイティブの日本語や日本文化が学習者に押し付けられてしまう可能性もある。瀬尾・瀬尾（2019）のプロジェクト活動では、留学生と日本人学生のやりとりのなかで、日本人学生が「日本人らしさ」を誇張して説明をすることで、学習者の本質主義的な文化観がさらに強化されてしまったことが報告されている。久保田（2015）が指摘するように、日本国内にも性別や地域、世代、社会・経済・政治的立場などによる多様性が存在し、それらは時代によって常に変化し続けている。日本人や日本文化を固定的に捉えて指導することは、学習者にステレオタイプを植え付けてしまうことにもなりかねない。

そこで、筆者らは、日本人や日本文化の多様性や流動性に対する理解を学習者に促せるように、日本語中級授業においてインタビュー・プロジェクトを行ってきた。プロジェクトでは、受講生に日本に来てから不思議に思っていることをインタビューしてもらい、そのインタビューの内容をまとめたものをもとに学内の日本人学生と意見を交わすことで、日本国内の様々な考えや意見に触れさせることを目指してきた。これまではこのインタビュー・データの視聴とディスカッションを授業の受講生や学内の日本人学生とのやりとりに限定をして行ってきたが、より多様な人々と議論が交わせるようにと、本稿で紹介する 2018 年度の実践では、データの視聴とディスカッションの部分を茨城大学の公開講座として開講し、様々な年齢層の人々の参加を促した。世代差を超えたやりとりを促すことで、受講生に対して日本人や日本文化の多様性や流動性に対する理解を促したものの、本実践ではそれが十分にできなかったように感じられた。実践報告においては、通常はうまくいった実践を紹介する傾向にある。だが、Kumaravadivelu（2012）が「うまくいかなかった授業からも、うまくいった授業と同じくらいの多くのことが学ぶことができる」（p.90 筆者訳）と指摘

**インタビュー・データについて地域住民と話し合うプロジェクト活動  
—日本語中級授業での実践をふりかえり、その問題点と改善策を検討する—**

するように、うまくいかなかった実践にも目を向ける必要があるだろう。そこで、本稿では、筆者らのプロジェクト活動をふりかえり、なぜ本活動において受講生が文化の多様性や流動性に対する理解を十分に深めることができなかつたのかを考察し、その改善策を検討する。

## 2. プロジェクト活動の受講生およびスケジュール

本稿では、茨城大学の日本語中級授業で 2018 年度前学期（4 月～8 月）に行ったプロジェクト活動をふりかえる。本活動には、韓国（4 名）、インドネシア（2 名）、アメリカ（1 名）、ブルガリア（1 名）からの交換留学生 8 名が参加した。そして、活動の 4 回目（表 1 参照）のインタビュー・データの視聴は、茨城大学の公開講座として参加者を募り、40 代から 60 代の男女 5 名の地域住民が参加した。

活動では、受講生達が日本で生活して関心を持ったテーマについてインタビューをし、そのインタビュー・データを一つの映像作品にし、それを地域住民と視聴し、そのテーマについてみんなで議論した。活動を開始するにあたり、受講生には日本人や日本文化の多様性や流動性に目を向けることが本活動の目的であると伝えた。そして、そのために、複数の人々にインタビューをすること、個人の経験や意見を引き出す質問をするよう心掛けることを伝え、さらに多様な考えや意見に触れられるように、公開講座で様々な年齢性の人々と議論をするということを説明した。本プロジェクト活動は全 30 回ある授業（1 週間に 2 回、15 週間）の 5 回の授業時間を用いて行った。表 1 に受講生に提示したプロジェクト活動の流れを記す<sup>1</sup>。

**表 1 受講生に提示したプロジェクト活動の流れ**

<p><b>タスク</b></p> <p>興味があるトピックについて、インタビューする。そして、インタビュー・データをまとめ短いビデオを作成する*。それを地域の人と視聴し、そのトピックについて考える。</p> <p>※このタスクは、ペアで行う。</p> <p><b>タスクの流れ</b></p> <p><b>1 回目：2018 年 5 月 18 日（金）の授業</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>① ペアでテーマを一つ決めます。二人が興味を持っているテーマを考えてください。</li><li>② インタビューについて決めてください。何人に、だれにインタビューしますか。どうやってインタビューのお願いをしますか。いつ、どこでインタビューしますか。</li></ol>
---

<sup>1</sup> 活動の流れはプリントアウトし、受講生に配布した。

## **2 回目 : 2018 年 5 月 22 日 (火) の授業**

- ① 質問を作ります。本やネットで調べればわかることは質問せず、相手の経験や意見を引き出す質問を考えましょう。
- ② 作った質問をお互いにインタビューしてみます（他のクラスメートも含めて何回か）。質問の意味がわかるかどうか答えやすいかどうかなどをチェックしましょう。必要なら、質問を修正してください。
- ③ ビデオ作成のポイント・評価について考えます。

## **2018 年 5 月 22 日 (火) ~28 日 (月) の間**

- ① インタビューのお願いをして、インタビューの日時と場所を決めてください。テーマも伝えておきましょう。インタビューはペアで行ってください。
- ② インタビューする。
  - ・インタビューの承諾書にサインをしてもらってください。
  - ・インタビューはビデオ録画してください（顔出し NG の人は、下半身を映すなど配慮してください）。

## **3 回目 : 2018 年 5 月 29 日 (火)**

- ① インタビューの進捗状況について尋ねます。インタビューを通してどのようなことがわかったのか簡単に報告し合います。ビデオが編集できていれば、この時点で持ってきてください（クラスでコメントし合います）。

## **2018 年 6 月 1 日 (金) 23:59 まで**

- ① インタビューを 15 分程度に編集し、E メールで提出してください（添付ファイルではなく、Google Drive や Dropbox などのファイル共有サービスあるいは YouTube などの動画共有サービスを使ってください）。

## **4 回目 : 2018 年 6 月 2 日 (土) 10:00~12:00**

- ① 持ち寄ったインタビュー・データを視聴し、データについて地域の人を交えて話し合います。

## **5 回目 : 2018 年 6 月 5 日 (火) —ふりかえりセッション**

- ① プロジェクトについてふりかえります。

## **2018 年 6 月 11 日 (月) 23:59 まで**

- ① リフレクションの提出。活動を通して思ったこと、感じたこと、学んだことについて A4 用紙 1 枚程度で書いて、E メールで提出してください。

本プロジェクト活動の各グループのテーマは以下の通りであった。

- ・大学の授業に対する意識（韓国・インドネシアからの留学生）
- ・英語に対する意識（韓国・インドネシアからの留学生）
- ・K-pop に対する意識（韓国・アメリカからの留学生）
- ・留学生のアニメに対する意識（韓国・ブルガリアからの留学生）

### 3. プロジェクト活動の流れ

本プロジェクト活動では、筆者の一人（瀬尾）が授業の受講生及び公開講座の参加者の同意を得て、ビデオ撮影を行った。データの分析では、映像データを文字起こししたものを読み込んだ。本稿では、各国の学生の英語に対する意識を題材にインタビューを行ったペア（韓国からの留学生 A さんとインドネシアからの留学生 B さん）に着目し、かれらがどのようにこのプロジェクト活動を経験していたのかを描きながら実践をふりかえりたい。

#### （1）1回目（2018年5月18日）—ペアでテーマを考える

1回目では、筆者の一人（瀬尾）が表1のプロジェクト活動の流れをもとに受講生に対してプロジェクト活動の概要を説明した。その後、ペアに分かれて話し合い、それぞれのペアでインタビューのテーマを決めた。

ペアの話し合いで、まずインドネシアからの交換留学生の B さんが日本に来る前に現地の教員から「日本では英語を話せる人がいない」と言われた経験について話をした。そして、A さんも、茨城大学の日本人学生と英語で学ぶ授業を履修し、茨城大学の日本人学生が英語をあまり話せないと感じていたため、B さんの話に興味を持った。そして、二人は、茨城大学のある水戸市が「田舎だから」、学生を含む水戸市の人々は英語を使う必要がないのではないかと述べた。

A さん： 英語をあんまり使わない。ここはなんか田舎だから。

瀬尾： 【A さんと B さんが話しているところに割って入っていく】田舎だから英語をあんまり使わない？

A さん： そうかもしれないと、よく行く（大学近くの）店を考えたら、英語を使う人が全然いないですね。なんか東京とか観光地、有名な観光地とか、外国人が多い場所ではなんか英語を使っても大丈夫じゃないかなと思う意識があるけど、そうですね、ここ【=水戸市】ではあんまり使う感じがない。

この話の流れで、瀬尾は二人の国の大学で英語がどのような位置づけにあるのかを尋ねた。すると、まず、韓国からの留学生の A さんが、A さんの大学では、大学を卒業するためには、TOEIC で 780 点以上取ることが求められていると述べた。

A さん：（水戸市では）なんか普通に（英語が）できる人が少ない。  
瀬尾：韓国だと、（A さんの）大学だともっと英語で話す人が多い？  
A さん：なんか卒業する時に TOEIC の点数とか、TOEIC のスピーキングとか（大学に）提出が必要だから、英語でする授業のほうが多いし。  
瀬尾：あっ、英語でとれる授業が多いんですか。  
A さん：私も（英語は）上手じゃないですけど、まあそうですね。  
瀬尾：何点ぐらいいるんですか、卒業までに TOEIC（のスコアは）？  
A さん：780 点ですね。

そして、インドネシアからの留学生の B さんも、インドネシア国内では大学の授業が英語で行われるかどうかは地域によって異なってはいるが、B さんが生まれ育ったバリ島では、英語が「義務のような感じがする」と述べていた。

瀬尾：インドネシアもそうですか。インドネシアも（授業は）全部英語？  
B さん：地域によって違います。  
瀬尾：大学によって、地域によって、なるほど。  
B さん：バリでは（英語は）義務のような感じがする。  
瀬尾：そっか、大学は英語の授業が多いのか。  
B さん：はい、そして、小学校から（英語の授業をやります）。そして、今では幼稚園から（英語を）勉強するそうです。

このように二人は日本、韓国、インドネシアの大学で英語がどのように位置づけられているかを話していくなかで、世界の国々で英語がどのようにして学ばれ、人々が英語に対してどのような意識を持っているのかを探りたいと考えようになった。

八若：じゃ、A さんと B さんのペアは何をしますか。  
B さん：英語の必要性。  
八若：英語の必要性について。はい、例えばどういうこと？  
B さん：いろんな国の人に話を聞いて、まずは英語できますか、話せますか、いつから勉強しますか、そして自分の国の学校でいつから英語を勉強しますか、そして自分の国でいつ英語を使いますか、そのような質問をします。

**インタビュー・データについて地域住民と話し合うプロジェクト活動**  
**—日本語中級授業での実践をふりかえり、その問題点と改善策を検討する—**

(2) 2回目 (2018年5月22日) —ペアでインタビューの質問を考える

2回目の授業の前半で、受講生はインタビューで尋ねる質問を考えた。その後、授業の後半では、異なるペアのクラスメートに対して作成した質問を尋ねてみて、質問の意味がわかるかを確認した。

AさんとBさんの二人は、以下の質問を作成した。

1. あなたは英語が話せますか。
2. あなたはいつから英語を勉強していますか。
3. あなたはよく英語を使いますか。どうしてですか。
4. あなたの国で、英語が話せる人が多いですか。どうしてですか。
5. あなたの国ではいつから英語を勉強していますか。
6. あなたの国では日常生活でよく英語を使いますか。どんな時に使いますか。
7. あなたの国で、就職する時、英語が必要ですか。

実際のインタビューでは、半構造化インタビューの形をとり、回答者の答えによってさらに別の質問を尋ねるようにした。

(3) 教室外 (2018年5月22日～28日) —インタビューする

二人は教室外で、中国、タイ、マレーシア、インドネシア、ブルガリア、ナイジェリアからの留学生6名(それぞれ1名ずつ)と日本人学生1名に対してインタビューを行った。中国、タイ、ブルガリアからの留学生には日本語で、マレーシア、インドネシア、ナイジェリアからの留学生には英語でインタビューを行った。

(4) 3回目 (2018年5月29日) —進捗状況を報告する

3回目の授業で受講生はインタビューの進捗状況を報告した。ビデオの編集ができているグループには、編集したビデオを上映してもらい、そのビデオに対してコメントをしあった。

AさんとBさんの二人は、この時点ではまだインタビューをしている途中で、ビデオは作成できていなかった。そこで授業では、この時までにはインタビューをした4名(タイ、マレーシア、ブルガリア、ナイジェリア)がどのようなことを話していたのかを簡単に説明してもらった。すると、インタビューを通してかれらはどの国でも就職のために英語が重視されていることがわかったと述べた。

- B さん： (どの国でも) 英語は大切なものです。
- 瀬尾： ほう。どうして(英語が)大事かも聞いてみましたか。
- B さん： えっと、就職の時、その英語の能力はなんかプラス点だと感じが  
します(と言っていました)。
- 瀬尾： あー、おもしろいですね。それはどこの地域も同じ？ みんな就職  
のためには英語が大事？
- B さん： うん。今まで(のインタビューでは) そうです。

かれらはこの時点ではまだ日本で教育を受けた学生に対してインタビューは  
行ってはいなかった。当初かれらは、なぜ日本では英語が重視されていないのかに  
興味を持っていたため、そのあたりのことを調査するのもいいかもしれないと担当  
教員達はコメントをした。

- 瀬尾： 日本(の人に)も聞くんですね。
- A さん： はい。
- 八若： 最初は どうして日本がそんなに英語が重視されていないかという  
ことだったんですね【=ということに興味を持っていたんですね】。多分ほかの国と(英語に関する)重要度が(日本は)違う。
- A さん： なんか日本人の英語は重要じゃない。
- 八若： そう、重要ではない、そういうことですね。
- 瀬尾： そこ、もっと見ていったらおもしろいと思います。他の国では  
こんなに(英語が)重要視されているのに、日本は。
- 八若： 重要だと言いながら、これだけしかやっけていなんだみたいな。
- 瀬尾： 確かに。そうだったらすごくおもしろい。

そして、授業後に二人はさらに日本で教育を受けた学生にもインタビューをし、  
日本の状況についても尋ね、それらをまとめて公開講座で上映するビデオを作成した。

#### (5) 4回目(2018年6月2日)ー公開講座での発題

4回目の授業では、インタビュー・データの視聴およびディスカッションのための  
時間を設けた。既に述べたように、本実践ではインタビュー・データの視聴とディス  
カッションを単に受講生と授業担当教員との間で行うのではなく、より多様な人々と  
議論ができるようにと、茨城大学の公開講座という形で参加者を募集した。公開講座  
は土曜日の朝に行い、40代から60代の男女5名の地域住民が集まった。



インタビュー・データについて地域住民と話し合うプロジェクト活動  
—日本語中級授業での実践をふりかえり、その問題点と改善策を検討する—

インタビュー・データの視聴では、各ペアがまず何についてインタビューをしたのか、どうしてそのテーマに興味を持ったのかなど簡単に概要を説明した。そして、インタビュー・データを 10 分ほどにまとめたビデオを上映した。ビデオ視聴後は、10 分ほどビデオのテーマや内容について参加者間で意見を交わした<sup>2</sup>。

写真 1 公開講座の様子



インタビュー・データをまとめたビデオを上映するまえに、B さんは日本に来る前に「日本人はあまり英語が話せない」と言われた経験を共有した。

B さん： えー、このインタビューは英語の重要性について話します。色々な国々の英語の重要性です。どうして私たちがこのテーマを決めたというのは、私は日本に来る前に先生に言われました。それは「日本人はあまり英語が話せますよ。」

瀬尾： 話せませんよ

B さん： あっ、話せませんよ、気を付けてねと言われました。ですからこのテーマが思いつきました。

ビデオでは、日本以外の学生が小学校から英語を勉強し始めたと言っており、日本人学生の C さんのみが中学校から勉強し始めたと述べていた。そして、日本以外の学生が、自国の人々は英語が「話せると思う」と言う一方で、C さんだけが「あまり話せないと思う」と述べ、それは「日本の英語教育に問題がある」からだと話していた。

---

<sup>2</sup> 公開講座の参加者には学生が作成したビデオをもとに話し合いをするということを公開講座募集の案内や公開講座の当日に伝えていた。しかし、筆者らが意図していた日本人や日本文化の多様性や流動性に対する理解を深めるということは十分に説明をしておらず、この点については今後の反省点としたい。

【「自分の国で人々は英語が話せますか」という質問に対して】

Cさん：あまり話せないと思います。日本の英語教育に問題があると思っています。日本の英語教育においてスピーキングを培う能力は高まりません、それが問題です。

そして、「自分の国で就職する時、英語が必要ですか」という質問に対して、日本以外の学生が「必要だ」と述べていたのに対し、Cさんは、「必要じゃない場合」もあると語り、必ずしも就職において英語が必要ではないと話していた。

【マレーシアからの留学生】

Dさん：絶対に必要です。海外でやるビジネスが多いために非常に重要です。

【日本人学生】

Cさん：必要な場合もあります。必要じゃない場合もあります。商社とか、賃金が高い企業ほど英語の能力が求められると思います。

これらのインタビューの結果は、二人が日本に来てから感じていたことを裏付けるものであり、ビデオ上映後にAさんは全体に向けて次のように語った。

Aさん：平均的に日本人は英語ができる人が少ないという意識があります。で、ここ【＝水戸市】に来たあと、日本の学生達と話したら、なんか英語の勉強はずっとしたんだけど、（英語が）できないと話す人が多かったです。だから、なぜそんなに普通に英語ができないか問題意識があつて。【中略】今は日本は就職が楽。なんか今の時代はなんか（日本では）就職がちょっと楽だと思います。韓国は正反対です。今は就職がめっちゃ厳しくて、（韓国では大学の）卒業生が60%だけ（しか）就職できないです。なんか本当にいい大学を卒業したとしても、就職ができない時代で、英語能力が必要というよりは、普通に必ず持っていることだという認識が（韓国では）あります。だから【＝就職が楽だから】日本の学生達は英語の必要性を感じることはないかなと、そう思って、だからインタビューしました。

このように A さんは、日本の大学生が英語を話せない理由には、韓国よりも就職がしやすいからではないかと考えていた。この発言に対して、公開講座の参加者が自分の息子の経験を交えながら次のように述べた。

E さん： 私の息子がもう働いているんですけどね、日本では会社に入った時に、例えば TOEIC を受けるのが、すごいそういうプレッシャーはあるみたいです。

A さん： あー、はい。あーでもなんか TOEIC の点数が、ハードルが低いです。

E さん： それと、もう一つ実はちょっとあるヨーロッパの国と仕事をしてるんですね。で、そこの部署は母国語が英語ではないので結局仕事をする時にやむを得ず英語を使わなきゃいけないんです。英語で全部やってるみたい。結局そういう必要性がある人達は、勉強しているし、やっぱりやらざるを得ないっていう風に思っています。

ここでは E さんが自分の息子の経験を交えながら、日本の会社でも TOEIC のスコアが重視されていることを語っている。しかし、A さんは、「TOEIC の点数が、ハードルが低いです」と述べ、求められるスコアは低いのではないかと指摘した。それに対して、E さんは、さらに別の例を用いて英語を求める会社があるということをも主張している。これまで留学生達が接する日本人は大学生に限定されており、就職した社会人の経験や意識を聞く機会はなかった。ここで社会人の息子を持つ母親が自分の子どもの仕事での様子を共有することは、また別の日本人像を留学生達に紹介するきっかけとなっていたといえる。

しかしながら、留学生達はまだ E さんの発言には半信半疑だったようで、次のやりとりではインドネシアからの別の留学生の F さんが、YouTube で見たインタビュー動画では、あまり外国へ行かなくてもいいと述べる日本人が多かったと述べ、それは本当かどうか気になっていると参加者に尋ねた。

F さん： 私はみなさんに聞きたいことがあります。ある日私は YouTube を見ました。(ビデオの) YouTuber は東京で人々にインタビューしました。質問はどうして日本人はあんまり英語を使いませんかという質問です。そして大体日本人は、「外国へ行かなくてもいいよ」って言って、私は気になりました。それは正しいですか。

これに対し、公開講座の参加者 G さんが、自分達の子どもを例にしながら人によって違うと言い、誰もが外国へ行かなくてもいいと考えているわけではないと述べた。

G さん 多分人によるかなと思います。例えばうち子どもが 3 人いるんですけど、一番上の子と一番下の子は外国行くの好きです。一番上の子はやっぱりみなさんと同じように 1 年間台湾に留学しました。

【中略】真ん中の子は高校の時に理科の勉強やって、アメリカに行ったんですけど今はもう外国には行きたくないって言ってます。一番下の子は高校でも留学に行って、大学でもまた行きたいって言ってます。【中略】

H さん 英語の必要性についてですけど、私の息子は高校の英語の教師です。ですから彼はイギリスに行きたいと言っています。それからもう一人の息子もいるんですけど彼は行きたくないと言っています。ですから人それぞれだと思いますね。

このように日本人内の多様な考えや価値観が公開講座の参加者から語られはじめていた。だが、時間の関係でこのテーマについての議論はここで終わってしまった。

#### (6) 5 回目 (2018 年 6 月 5 日) 一ふりかえり

5 回目の授業では、授業時間の 30 分間を使い、本プロジェクト活動のふりかえりを行った。ふりかえりでは、①インタビュー・ビデオの作成について（「こんなことがわかってよかった」と思ったこと、「こうしたらよかった」と思ったこと）、②他のグループのインタビュー・ビデオについて（「おもしろい」と思ったこと、「すごい」と思ったビデオ）、③公開講座の参加者との話し合いについて（話し合っただけのこと、もっと意見が聞きたいと思ったこと）についてペアで話し合い、その後クラス全体で共有した。そして、授業終了後、受講生は A4 用紙 1 枚でふりかえりレポートを執筆した。

本実践を通して、A さんと B さんは様々な国の人々にインタビューをすることで、自分達にとっては馴染みのない国の英語の位置づけについて理解することができたという。例えば、二人が作成したビデオで、ナイジェリアからの留学生がナイジェリアでの英語の位置づけについて次のように述べていた。

I さん： ナイジェリアは 1960 年に独立するまで英国の植民地でした。ナイジェリアには 520 以上の言語がありますが、英語を公用語として選択して使用しています。小学校の教育言語も英語です。

これについて B さんはプロジェクト活動終了後に記したふりかえりレポートに、「ナイジェリアで英語が話す国ということを知りました。520 の言語を結びつけるのが英語だということに驚いた」と書いていた。このように、様々な国からの留学生に対してインタビューをすることで、これまで自分達があまり知らなかった国の事情を知ることができたのである。

また、本活動の世代間を超えたやりとりにも意義はあったようである。A さんは、ふりかえりで次のように述べていた。

A さん： あの日、他の人達、日本の大人の考えることが、結構不思議になりました。アニメの話をする時に【=あるグループがアニメの意識に関するビデオを作成し、それについて話し合った時に】、アニメの産業が大きいですね。けど、あれを知っているけど、正確にはどうやって大きいのか、なぜ若い人達があの産業を好きなのかということをよく知らない雰囲気を感じて、あれはちょっと不思議というか。

八若： 世代間というか

A さん： 世代間があるって思いました。おもしろかったですけどね。

留学生達は日本で生活をしているものの、世代間を超えたやりとりをすることは極めて少ない。そのため、公開講座で地域住民、特に年配の人達と話すことは、「不思議」ではあったものの、「世代間」の違いを感じて「おもしろかった」という。だが、その一方で、「あの人達と共感できる、なんか話すことが多いトピックを選択したほうがいいじゃないかなと思った」とも述べ、互いに話し合えるトピックを選んだほうがよかったとも感じているようだった。

A さん： なんかトピックを詳しくして、あの人達【=公開講座の参加者】と共感できる、なんか話すことが多いトピックを選択したほうがいいじゃないかなと思いました。

このように世代間での関心には違いがあることに気づき、よりよい交流を行えるように他者のことを考えられた点は、世代を超えた交流のよさだったと言えるだろう。

#### 4. 本プロジェクト活動の問題点とその解決策

本活動では、受講生達がインタビューを通して新たな情報を得たり、世代間を超えたやりとりに意義を見出したりしていることが窺えた。だが、受講生達は文化の多様性や流動性に対する理解を十分に深めることができなかつたかのではないかと考える。本節では、その理由と改善策を議論したい。

まず、二人のインタビューでは、それぞれの国の一人にしかインタビューをしておらず、その一人の意見をその国を代表する声として捉えてしまっていたようにも感じられる。例えば、インタビュー・データでは、日本以外の国からの留学生は、全員就職のために英語が必要だと述べていたというのが、希望する職種や学歴などによっても異なる可能性があつただろう。また、二人は単に就職のために英語が必要かどうかを尋ねるに留まっていたが、さらにインタビューをした相手がどうしてそう思っているのか、そう思うようになった背景についても尋ねることで、その考えの裏にあることやその考えがどのように構築されたのかを深く知ることができたのではないだろうか。そして、学習者に対するインタビューの指導で、インタビュー相手に個人の意見として語ってもらうようにしたり、インタビューした内容がその地域を代表する声ではないということも伝えておく必要があつたのではないだろうか。本実践は、日本人や日本文化の多様性や流動性に対する理解を深めることを目的に行い、その点についてプロジェクトの最初の時点では説明をしていた。だが、プロジェクトが進むにつれて一人のインタビューの意見をそのまま鵜呑みにしないようにする、一人の意見だけではなく複数の人に聞くなどの指導が十分に行えてはいなかった。今後は、筆者らが意図する本活動の目的を受講生により明示的に伝え、目的から外れる受講生がいたら指導をするなどの対策を講じる必要があるだろう。

また、二人がインタビューをする前から抱いていた日本人は英語が「あまり話せない」、就職に英語が「必要ではない」という考えは、かれらが行った日本人学生一人へのインタビューからさらに強化されてしまっていた。このことは、地域住民を交えて意見を交わすことで筆者らは解消されるのではないかと期待していた。鈴木(2005)は、留学生と日本人の接触場面において、社会一般的な発話よりも個人的な観点からの発話のほうが、その後の談話が多角的に発展し、「統一的な日本人イメージからの脱却」(p. 21)が期待されると指摘している。だが、本実践では、留学生達は自分達の考えを裏付ける日本人学生の意見を通して思い込みが強化される一方で、それを否定する公開講座参加者達の自分の子どもの経験をもとにした個人的な発話を単なる一事例として受け止め、かれらが持つ日本人に対するイメージを脱却させることはできていなかった。

この問題を解決するためには、両者がより深く話し合える場を作り出す必要があったのではないだろうか。本実践ではインタビュー・データをまとめたビデオを視聴した後にディスカッションの時間を設けてはいたものの、それぞれのテーマについて10分しか時間を取ってはいなかった。また、教室全体でディスカッションを行っていたため、各々がそれぞれの意見や考えを述べるにとどまり、十分な意見交換が行われているとは言い難かった。鈴木（2005）が述べるような談話を多角的に発展させていくためには、それぞれの参加者が一方的に話すのではなく、小さなグループで時間をかけて話し合ったほうがよかったのかもしれない。また、学習者がディスカッションしたい点をもっと明確に定めたり、事前にディスカッションを展開する方策を指導したりすることも必要だったのではないだろうか。例えば、最初に受講生が作成したビデオをまとめて公開講座の参加者に視聴してもらい、その後グループに分かれて受講生が議論をファシリテートする形でディスカッションをする。そうすれば、120分の公開講座で、最初の45分でビデオの視聴、残りの75分でディスカッションを行うことができる。また、小グループで話し合うことで、受講生達はより深くそれぞれのテーマについて参加者と議論を深めることができるだろう。そして、グループを入れ替えることで多様な人々との議論も実現できるだろう。

## 5. おわりに

本稿では、筆者らが日本の茨城大学で行ったプロジェクト活動をふりかえり、1) 受講生が行ったインタビューの方法、2) インタビュー・データを基にしたディスカッションの方法の問題から、受講生が文化の多様性や流動性に対する理解を十分に深めることができなかつたことを指摘し、その改善策を述べた。

本実践は、日本国内でのプロジェクト活動を題材にしているが、学習者にインタビューをさせたり、日本語母語話者を授業に呼んだりする実践は日本国外の日本語教育の現場でも行われているだろう。日本語や日本文化との接触場面の少ない外国語環境下では目標言語圏に対するステレオタイプの構築が問題となり、教師や教科書がさらにそのステレオタイプを助長する可能性がある（熊谷 2008）。この問題を解決するために、筆者の一人（瀬尾）が海外で日本語を教えていた際にはインタビュー・プロジェクトやビジターセッションを行っていた。だが、本稿で指摘したように、その方法に問題があれば、文化の多様性や流動性に対する理解を深めるどころか、学習者の持つ既存の考えをさらに強固なものにしてしまう可能性がある。筆者らが失敗から学んだことが、プロジェクト活動やビジターセッションを行う上で参考になればと願っている。

## 参考文献

- 赤木浩文 (2013) 「日本語コースにおけるビジターセッションの学習効果と課題」『専修大学外国語教育論集』41, pp. 87-104.
- 久保田竜子 (2015) 「批判的アプローチによる日本語・日本文化の指導」『グローバル化社会と言語教育』(pp. 147-168) くろしお出版
- 熊谷由理 (2008) 「日本語教室におけることばと文化の標準化過程」佐藤慎司・ドーア根理子(編)『文化、ことば、教育』(pp. 212-238) 明石書店
- 鈴木伸子 (2005) 「留学生に対する日本人協力者の個人化した説明が談話の展開に与える影響」『リテラシーズ1』(pp. 55-68) くろしお出版
- 瀬尾匡輝・瀬尾悠希子 (2019) 「映像を用いた実践共有の課題と可能性」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』2, pp. 87-90.
- 中井陽子 (2003) 「談話能力の向上を目指した会話教育」『講座日本語教育』39, pp. 79-100.
- 横須賀柳子 (2003) 「ビジターセッション活動の意義とデザイン」宮崎里司・ヘレン・マリオット(編)『接触場面と日本語教育』(pp. 335-352) 明治書院
- Kumaravadivelu, B. (2012) *Language Teacher Education for a Global Society*. New York, NY: Routledge.